

『信仰の旅人』詩篇39:12

主よ、わたしの祈を聞き、わたしの叫びに耳を傾け、わたしの涙を見て、もださないでください。わたしはあなたに身を寄せる旅びと、わがすべての先祖たちのように寄留者です。

●序論

50年前のドラマから生まれた映画「50年目の俺たちの旅」主人公たちが70代・80代になった物語です。その当時の主題歌などを聴くと、とても切ない歌詞とメロディだな…と、感じます。

「旅」という言葉を冠するこのドラマ。彼らはさしづめ人生の旅人として、哀愁をもテーマにしているのでしょうか。

今日お読みした詩篇39篇は、自分のことを「旅人」と呼ぶダビデの歌です。

人生の旅路にある悲哀を言葉にしたものであり、またその地上での生涯の終焉にも目を向けたようなものです。

39:4 「主よ、わが終りと、わが日の数のどれほどであるかをわたしに知らせ、わが命のいかにはかないかを知らせてください。

自分の人生にこれまで経験し、今も感じているような、はかなさというもの。幸せも、また災いという経験も、またこれだけ頑張っているのに報われないようなことの中でも…、彼は、それを人に向かってではなく、神さまに向かって告白しています。

39:7-9 ああ、人はただ影のように移ろうもの。ああ、人は空しくあくせくし だれの手に渡るとも知らずに積み上げる。主よ、それなら 何に望みをかけたらよいのでしょう。わたしはあなたを待ち望みます。

その上で訴えます。

:9 あなたに背いたすべての罪からわたしを救い 神を知らぬ者というそしりを 受けないようにしてください。

神を知り、その神さまがすべてをご支配し、ご存知であり、また報いてくださる方であると知る信仰者の訴えなのだわかります。

「信仰の旅人」というタイトル。信仰者も、この生きている間に生活があり、その日々があり、そこにそれぞれの人生が伴います。この詩篇の作者ダビデもその一人です。その人生のはかなさを口にしながらも、そこには信じて生きる人としての違いを見せて いるのです。

●本論

I. 神との出会いで始まった旅です

わたしはあなたに身を寄せる旅びと、わがすべての先祖たちのように寄留者です。(:12b)

「旅人」という言葉は、旅行者という言葉とはニュアンスが違います。

「旅」は、時に目的さえなくて、いや目的を探すことさえその内容に含まれます。

そういう意味では、今までのような観光や慰安目的の「旅行」という者とは違うな…ということはわかります。

そして人生が「旅」にたとえられるのは、通常の旅に様々な予測不能な出来事や出会いがあるのと同じ情景が重ねられるからです。

つまり、その旅路の中で幸せや不幸や、喜びや悲しみ、色々な人との出会いや別れを経験しながら、自分の人生を築き上げ、そしてこの地上での生涯を全うする…というような意味なのかな…と想像できます。

「信仰の旅人」というとき、わたしたちが、クリスチャンとなったことで、わたしたちは「信仰者としての人生の旅」を歩む者とされた、ということです。

それは、かつての神を知らず、恵みと救いを知らずに生きてきたころとは違う歩みがあるということです。新しくされた自分としての歩みをわたしたちは経験しています。

2コリント5:17 だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。

今日一番目のポイントとして覚えたのは、わたしたちがイエス・キリストとの出会いによって始めているのは、「信仰の旅」であるということです。

そのことを通して、神さまがくださる新しい祝福の歩みがあるのだということです。

II. それぞれの信仰人生の旅路です

主よ、わたしの祈りを聞き、わたしの叫びに耳を傾け、わたしの涙を見て、もださないでください。(:12a)

信仰の人生に召しだされた、最も古い人の一人アブラハム。

ヘブル11:8- 信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った。

彼のその生涯の旅路は、さまざま、問題や迷い、また成功も失敗も経験するようなものでした。神さまに聞き、求め、叫びそして涙することもあったでしょう。それがアブラハムの経験した旅路でした。

そしてその旅路が彼を信仰者として育て、信仰の父と呼ばれるようになったのです。

今日の詩篇の作者ダビデもまた、その生涯の中で多くの悩みやつまずき、迷いを経験する信仰の旅路を続けてきました。 成功もあれば、失敗もある…、そんな中で、神さまに目を向け続け、神さまから、許しと癒し、そして祝福をいただいてきたので

す。

そういう経験を積み重ねてきた彼はだからこそ、

「わたしの涙に沈黙していないでください。」(新共同訳)と叫ぶことができたのです。 まっすぐに、素直に神さまに声を上げる祈りの言葉です。

はたして、わたしたちはどうでしょうか?

小さな説教集の序文にこんな言葉が語られていました。

人生の旅路はその毎日が未知への挑戦。全能者はすべての人にその人専用の特別コースを備えておられます。人は毎日、いまだかつてだれも通ったことのない未知なる道へと押し出されます。そこに日々の恐れや不安の原因があるのです。

先ほどの小説教集の著者は、自分が経験した問題を幸いなことと語ります。そういう経験の中で、絶えず神に目を向け神と共に歩まずに入られないからです…と語ります。

苦しみにあったことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを 学ぶことができました。(詩篇119:71)

そして、「わたしの涙に沈黙していないでください。」(新共同訳)と叫ぶことができる、信仰を持つことができるのです。

Ⅲ. 行くべきところを目指す旅です

聖書は、アブラハムを含む多くの信仰者の歩みについてこう記します。

ヘブル11:13-14 これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。そう言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。

振り返って、今日の詩篇でも、彼は、自分をこう表現します。

わたしはあなたに身を寄せる旅びと、わがすべての先祖たちのように寄留者です。

つまり、この世の成功や地位や富を、人生のゴールにはしていません。

聖書は「ふるさとを求めている」という風に表現します。

この地上での生涯は、「これらの人はみな、信仰を抱いて死んだ」とある通りです。

そういう約束に生きた人たちは、希望にあふれて旅立った人とされているのです。

「まばたきの詩人」と言われる、脳性麻痺で寝たきりの水野源三さんとその家族。その作品は、彼をさえたてきた家族の物語でもあります。彼の妹さんが記した本のタイトルが「『悲しみよありがとう』兄 水野源三の贈り物」とありました。

彼らは、この地上での生涯で「天のふるさとを求めていた人たち」でした。

はたして、わたしたちはどうでしょうか？

そんなことは、歳を取ってから考える…という答えが返ってきそうですが、わたしたちにとって、何を目指して人生の旅を進めるかが決まることで、今の生きざまが変えられるということです。

●さいごに

「…わたしはあなたに身を寄せる旅びと、わがすべての先祖たちのように寄留者です。」
新改訳では、「私はあなたとともにいる旅人で」とあります。

最初に紹介した映画を、そのポスターの端っこに「50年目の答え合わせ」とあります。

わたしたちの信仰の旅にも、その答え合わせをする時が必ずやってきます。
それは、最後に死に直面するときもそうですが、だれかとの別離の時かもしれません。
災害や予期せぬ問題に出くわす時かもしれません。
その時、「わたしはあなたに身を寄せる旅人、神さまと共にいる旅人」だろうか…と。

「答え合わせ」、それは試験で言うならば、それが正解かどうかを知るときです。

失敗や、自分の境遇や、自分の過ちや態度を評価して、もうダメだという人もいるかもしれません。

その気づきがあった時、イエスさまの十字架を見上げてください。このイエスさまが、わたしたちのすべての失敗も罪も悩みも、不幸も、その恵みで覆ってください、わたしたちに、天の故郷の祝福という答えを与えてくださいます。

人生のいろいろなタイミングで「小テスト」を受けて、そこで答え合わせを経験することもあるでしょう。それはイエスさまに気づき立ち帰るチャンスです。

そして、最後の最後この地上の生涯を終えて、神さまのもとに帰るとき、わたしたちはその信仰の旅路の答え合わせを知ることができます。

信じて生きてきた人は、すべてが恵みでおおわれていたことを、知ることができるのです。

今日の御言葉を、自分の祈りとして、また告白として大切にしてもらえたなら感謝です。

主よ、わたしの祈りを聞き、わたしの叫びに耳を傾け、わたしの涙を見て、もださないでください。わたしはあなたに身を寄せる旅びと、わがすべての先祖たちのように寄留者です。（詩篇39篇12節）